

ボランティアに見る新しい時代の方向性とネットワークづくり

宮下桂治(順天堂大学)

I 阪神に集まった若者のボランティア動機

研究室の学生達は「なんとかしてあげたい」と心に決めたら自家用車で現地入りしてしまったフットワークの良さにはおどろきを感じてしまった。

この様に、全国の若者たちはテレビの報道を見て「なんとかしてあげたい」「何か私にも出来ることがあるかも」と積極的に集まった若者である。

II 阪神で見た新しいタイプのボランティア

私が神戸市に行って目にしたボランティアたちは70%以上が10代、20代の若者で、これまで特別にボランティア団体に所属せず、また経験もない人たちだった。

それなのに行政の窓口に登録して連絡を待ったり、その対応によっては「行政批判」をしたり、指示を待っている保守的なタイプの人と比べて「何かお手伝いすることありませんか」と仕事を見つけて歩く新しいボランティアたちであった。

III 神戸で体験した「個」が生かされる新しいボランティア活動システム

私が体験した神戸区役所の前では次の様な活動をしていた。

- ① 行動する内容・場所・人数・時間などを、自分たちで見付けてきてカードに書き出して掲示する。
- ② その場で、活動を望む人はカードの中からどれか選択する。決まったらそのカードに自分の名前を紙に書き、行動現場に自分で行く。
- ③ 活動から帰ったら、そのカードに活動内容と、継続の場合の引継ぎ事項を書き、報告を記入して終了となる。

夜には時間になればミーティングがある。どこからか集まってきて、テントの中はいっぱいになる。

どんどんシビアな反省が出るし、改善策もでた。

行政の人もいるが、批判や文句を一つも言わず「自分で何をすべきか」と自分たちのこととしてやっている。

このテントの中では、ボランティア団体での活動者であっても、「個」として行動を求められていた。

なんと言っても「個の自由」を認めていることが、一人ひとりを躍動させたし、私自身も活動そのものが楽しかった。

— 最後 に —

これまでのように、ピラミッド型の組織を作って団体型での運営をしていくシステムから、「個」の意志で判断して参加していくこのボランティアに見るシステムが構築されれば、団体指導型のレクリエーションから、自分の夢を実現する一人ひとりに価値あるレクリエーション活動が芽生えるものと考えられる。